

昭和三陸大津波から 90 年 『暴れ狂った海』 誕生への道

熊谷 勳

(大船渡市立綾里地区公民館長)

防災教育の推進で重要なことは、自分の判断で身の安全を守る「自助の力」と地域の人たちと助け合う「共助の力」を育成するため、各学校が家庭や地域と連携しながら進めることである。

防災教育への取り組み

私が防災教育に取り組んだ理由は、両親からの語り継ぎであり、その地域の歴史である。父親からは、自分の父親（私の祖父）が明治の三陸大津波で家族 5 人を失い、一人だけ助かった震災孤児の苦労や教訓を語り継がれたのである。母親からは、昭和の三陸大津波で被災した叔母たち一家を迎え入れ、生活困窮や復旧・復興の話を小さい頃から聞かされて育ってきた生い立ちがあった。



今回、昭和 8 年の三陸大津波から 90 年の節目を迎えるに当たって、私が現職時代の平成 18 年に子どもたちと一緒に『暴れ狂った海』と題して取り組んだ津波防災方言劇は、下記の越喜来小学校教頭時代の学習会が根底にある。

なぜなら、当時の三陸町の被害状況を調べていく中で、越喜来小学校はもとより、はるかに私の母校である綾里小学校学区の被害が甚大であることを再確認したからである。

そして、必ずや母校に戻って、明治の三陸大津波で震災孤児になった祖父（父親の父親）と、昭和 8 年の三陸大津波で母親の祖父母が犠牲になったことを題材に 6 年生に演じてもらい、津波の常

襲地である綾里地区全体の防災意識を高めることを決意したのである。

それから 10 年後の住田町立世田米小学校校長在職時、平成 10 年から津波と縁のない内陸部の小学校 3 校に在職し、退職まで 2 年を残してしまったので、強引にも母校の綾里小学校勤務をお願いし、津波防災方言劇『暴れ狂った海』がここに実現されるのである。

三陸大津波学習会（越喜来小学校）

最初に取り組んだのは平成 8 年 6 月 15 日、明治三陸大津波から 100 年を迎えた今から 27 年前の三陸町立越喜来小学校である。

本校は海岸から川沿いに約 300 メートルの所に位置し、明治の三陸大津波で 464 名、昭和の三陸大津波で 87 名が犠牲になっている。そこで、全校児童と保護者 170 名を対象に、「地域の災害の歴史を学ぶことによって、津波の恐ろしさを知り、自分の命は自分で守るとともに、防災への意識を高める。」ことをねらいに、明治 29 年と昭和 8 年の三陸大津波学習会を体育館で実施した。

学習内容は、町内の波高や浸水域、死者や不明者の数、流出家屋や学校別の被災状況などである。

明治 29 年三陸大津波（越喜来村）波高 9.8 m

被害前 戸数	流失 全半壊	被害前 人口	死者	負傷者
316	143	2,395	464	59

学校の被害（原文のまま）10月現在

死亡生徒31名。

- ・浦浜尋常小学校舎破損（目下開校授業中）
- ・崎浜尋常小学校舎流失（教員欠員のため休業中）
- ・甫嶺尋常小学校（教員欠員のため休業中）

昭和8年三陸大津波（越喜来村）波高8.1 m

被害前戸数	流失全半壊	被害前人口	死者	負傷者
514	145	3,379	87	35

児童9名死亡 越喜来小教員住宅流失

また、昭和8年の三陸大津波を体験した学区内の高齢者2名から、当時の津波の恐ろしさを直接お話頂いた。さらには、体育館に明治三陸大津波の被災状況のパネルなど45点を展示し、全校児童や保護者に見てもらった。全体会終了後は、4年生を対象に、学区内の「大津波の水位表」や「津波供養塔」「津波到達場所」などを実際に歩いて確認してきた。

翌年の平成9年度は、昭和8年の三陸大津波の浸水域を示した地図に、全校児童116名の家の場所や通学路を書き込み、下校時の避難場所や経路を確認した。昭和8年と同程度の津波が来たら、「自分の家がどうなるか」「下校途中だったら具体的にどこへ逃げるか」など、一人一人が考え、もしもの時に備えた。

また、子どもたちがいつでも避難場所を確認できるように、教室や廊下に「安全マップ」を掲示し、地区懇談会を通して保護者にも説明をし、防災意識の高揚にも努めた。

翌日早朝の三陸町防災訓練に、64%に相当する74名の子ども達が参加したのは大きな成果であった。



津波防災方言劇『暴れ狂った海』
（綾里小学校）

10年後の平成18年度、越喜来小学校の隣にある母校の綾里小学校に戻ってきた私は、大きなショックを受けた。

海岸から約400m離れた川沿いの本校の学区は、下記のように明治の津波で遡上高38.2mの国内最高を記録し、人口の56.4%の犠牲者を出している。また、児童151名の犠牲は、現在の大船渡市内最大の惨事で、学校も流出して寺院を借りての授業が続いた。昭和の津波でも、市内最高である180名が犠牲になった地域である。

明治29年三陸大津波（綾里村）波高38.2 m

被害前戸数	流失全半壊	被害前人口	死者	負傷者
367	297	2,251	1,269	57

学校の被害（原文のまま）10月現在

死亡生徒151名。死亡教員3名。

- ・校舎流失（寺院借用授業中）

昭和8年三陸大津波（綾里村）波高23 m

被害前戸数	流失全半壊	被害前人口	死者	負傷者
432	85	2,773	180	18

児童25名死亡 10日間休業



このような歴史があり、平成15年に国の地震調査研究推進本部が、「宮城県沖地震の確率が10年以内に39%以内」と発表しているにもかかわらず、津波注意報や警報の発令にも、児童の避難は10%未満で、津波浸水想定区域の住民は、皆無に等しい状態であった。

そこで、子どもたちや綾里の住民に対して、津波の恐ろしさを伝えなければならないと考えた。

その内容も、具体的で現実味を帯びたものでなければ、一人一人の心に響かないのは当然である。

地域住民に対しては、京大防災研究所などが進める防災教育チャレンジプランを活用して、明治と昭和の大津波被災状況と地区ごとの避難場所を明記した津波防災看板を誰にでも見えるように、道路に面した小学校の体育館前と三陸鉄道綾里駅前に設置した。

さらに、「明治と昭和の地区ごとの大津波被災状況」の資料（A4版カラー）を2回にわたって、863世帯の全戸配布をして啓蒙も図った。

子どもたちに対するねらいは、以下のように定めた。

- 1 本学区は、明治と昭和の津波で壊滅的な被害を受けた地域であることを理解するとともに、

それを風化させない態度を養う。

- 2 津波に関する劇を演じることによって、津波の恐ろしさを身をもって体験し、自分の命は自分で守る態度を養う。
- 3 劇を方言で演じることによって、祖父母とのコミュニケーションを図り、後世に伝える態度を養うとともに地域の防災意識を高揚させる。

子どもたちに対しては、10月後半に行われる学習発表会で、6年生に津波の劇を演じてもらうことを10年も前から考えていた。まず、担任が楽しみにしている学習発表会の構想を練る前の5月に、防災教育の重要性を説いて、脚本は私が手掛けるので、今回だけ子どもたちを貸してほしいと懇願したのである。

これは、校長として在職した以前の3校でも、その地域に伝わる歴史的な内容を取り上げて、全校児童や5年生、6年生に演じてもらったことも影響している。

教職最後の平成19年度は、『暴れ狂った海』の主題歌を製作したり、担任と子どもたちの手で、新たな劇のストーリーを考えたりと、津波に対する意識をさらに高めていった。それと共に、地域住民や関係機関等にも、防災意識の高揚が見られたのが、大きな成果として挙げられる。

『暴れ狂った海』誕生

津波防災方言劇『暴れ狂った海』については、脚本の中で一番頭を悩まし、決定までに三日間の時間を要したのがタイトルである。まず、『津波』という言葉を使わずに、津波で人の命や家屋、財産、道路や橋、建物など、あらゆるものをなぎ倒し、地域の思い出を破壊して、夢や希望までも打ち砕いたことを一言で表す言葉。もう一つは、海岸の人たちは海で生活し、海からの贈り物である海の幸などの海産物を頼りに生きてきたのである。そしてまた、これからも生きていくのである。従って、海を悪者にし、否定してはいけない。

これらのことから、最大限の恐ろしさを『暴れ狂う』ととらえたのである。そして、海を悪者に

しないよう、『狂った』の過去形とし、『暴れ狂った海』が誕生したのである。



この劇は、私が父母から語り継がれた明治の津波で震災孤児になった7歳の祖父の体験と、昭和の津波で母親の祖父母が犠牲になったことをもとに、「津波の恐ろしさ」「命の大切さ」「悲しみや生活困窮」、そして、「復興」をキーワードに4場面で作ったものである。

明治の津波で震災孤児になった祖父は、県央に近い内陸部に嫁いだ叔母に引き取られ、家人から厄介者として扱われて、慣れない仕事に大変な苦勞をしたようだ。

漁師として地元に戻った祖父は、再び昭和8年の津波に襲われ、またもや自宅は流された。祖父は、地震の後に、「この地震では津波が来るかもしれないから、着物を着たまま逃げの用意をしておけ。」と家族に話し、家族全員10名は無事に高台へ避難した。そして、津波が来た時には、津波体験者である祖父は、地区で一番早く逃げ、みんなに知らせたとのことだった。

一方、昭和8年4月の綾里尋常高等小学校入学を目前にした母親は、3月の津波で祖父母が犠牲になり、叔父は重症になった。母親の叔父は津波から自分の父母を守ろうと、両親を両脇に抱えて逃げ回ったが、気づいた時には右の手を見ても左の手を見ても、二人の姿はどこにもなかった。

以上のようなことを幼少時代から聞いて育ったので、「地震の後には津波が来ることや津波は人生の何もかも奪ってしまう。」ことは、海の近くで生きていく人間として、頭の中に叩き込まれたのである。それを綾里小学校の子どもたちに、綾里地区全体に、いや、近い将来襲うであろう津波の防災対策として、多くの人たちに意識させなけ

ればならないと、綾里人としても、校長としても、創作の意欲は高まるばかりであった。

6年生38名の子どもたちは、10月末の学習発表会で「燃えよ！役者魂」をスローガンに、慣れない方言で熱演してくれた。会場は大満員で、父母や祖父母に地域住民、7社のテレビや新聞など、近年にない盛り上がりを見せた。子どもたちは自分の大切な役割を無事に果たし、多くの観客に考えさせ、泣かせて、自分たちも本当に涙を流しながら演じたことに満足し、晴れ晴れとした姿で退場した。廊下に出てからも、感極まって私のもとに走り寄って泣き出した女子児童も数名いた。自分たちが、観客に津波の恐ろしさを訴えるのだという演劇の真髓が、6年生の子どもたちによって成し遂げられたのである。大成功だった。

方言劇にした理由は、子どもたちが脚本のセリフを覚える際に、父母や祖父母の力を借りて練習をすることによって、家庭や地域住民を巻き込み、防災意識の広まりをねらったものがある。その結果、子どもたちは、津波の恐ろしさを知り、自分の命は自分で守る心構えができ、津波情報に関心を示したり、訓練等にも参加したりする意欲が出てきた。



『暴れ狂った海』の反響（各地での演技）

私が退職後の平成20年に大船渡市で開かれた「海フェスタいわて」については、演技指導もしながら大船渡小学校の体育館で演技をした。また、その翌年の釜石市での県主催「津波防災フォーラム」は、三陸鉄道を利用して子どもたちは釜石市民会館で熱演を繰り広げた。

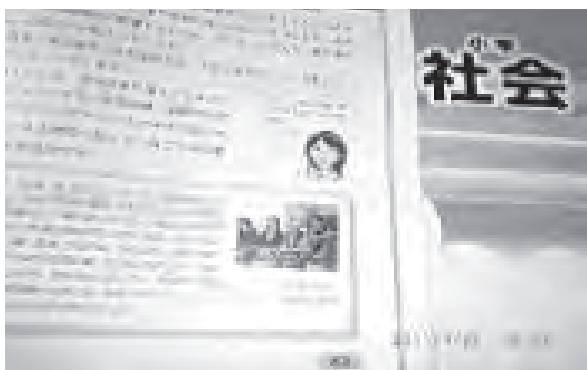
うれしいことに、平成21年に釜石市立釜石小学校、平成22年の大槌町立吉里吉里小学校は、「暴れ狂った海」のビデオや脚本を使って、その

学校の実態に即した内容にアレンジし、子どもたちが学習発表会で演じた。

その結果、綾里小学校と綾里中学校、釜石小学校と釜石中学校、吉里吉里小学校と吉里吉里中学校は、今回の津波で県内小・中学校で36名の犠牲があったにもかかわらず、一人の犠牲者も出さなかった。私は100回の避難訓練よりも、『暴れ狂った海』の演劇を1回経験することが大きな防災教育につながると考えている。

東日本大震災の瓦礫の処理がまだ不十分な平成23年度の学習発表会に、久慈市立宇部小学校や岩泉町立小川中学校、一関市立大東中学校、北海道網走市内の中学校でも取り組んだ。さらには、宮古市立崎山小学校、昨年度は綾里小学校からの転入生の提案で盛岡市立北厨川小学校でも取り組んだ。

一方、今年度の綾里小学校の6年生20名は、東日本大震災からの復興に取り組もうと、「綾里に生きる」をテーマに学習発表会で演じた。17年前を思い出しながら、脚本の構成や演技指導に何度となく足を運んだ。このような形で継続されることは、いつまでも津波の恐ろしさを忘れないためにも必要なことである。



平成23年度から現在まで、県内ほとんどの学校で使用されている小学5年社会科への「暴れ狂った海」の掲載が、大きな防災の役割を果たしている。

皮肉なことに、平成22年の早い時期に執筆者である山崎憲治先生から教科書へ掲載のお話を受

け、演劇の内容を確認したり、写真に対する保護者の了解を得たりして、教科書を心待ちにしていた4月を待たずに、東日本大震災に襲われた。まさに、「暴れ狂った海」だった。

この劇は、ポプラ社発行の図書「方言」や、河川情報センター発行の「防災関連月刊誌」などにも紹介された。防災教育チャレンジプランでは、「防災教育特別賞」、全国海岸協会からは県内で唯一「海岸功労者」としても高い評価をいただいた。

また、令和3年度には、鹿児島県評価問題研究所発行の5年生のテスト問題にも採用されている。令和4年度は、大船渡市東日本大震災追悼施設整備懇談会副会長として、大船渡市長に意見書を提出する役割も果たした。

『暴れ狂った海』の反響（学習会等）

前述の盛岡市立北厨川小学校でもそうだが、私は必ず演技に取り組む前に学習会を実施している。『暴れ狂った海—被災状況とその教訓—』をタイトルに、4部構成で ①東日本大震災の被災状況 ②過去の津波で甚大な被害を受けた地域 ③津波に対する課題 ④津波防災である。

津波の実態を知ることは、津波の劇に取り組む際の表現や動作・表情など、意気込みや訴える力が違う。観客を納得・共感させるためには、当然のことである。

演劇に取り組むか否かは別にして、退職後は防災活動の一助になればと、「暴れ狂った海—被災状況とその教訓—」の学習会に県内を走り回っている。

以前は、盛岡市立見前中学校、釜石地区小・中学校長会、埼玉県立越谷北高校、秋田県大仙市立太田中学校、鳥取県倉吉市立上灘小学校教員、東京書籍社会科編集部、花巻市生涯学習講座、一関東地区退職校長会などでの学習会で忙しかつたが、ここ数年は新型コロナウイルスの関係もあり、風化の一途をたどっている。